

対日輸出で成功する韓国パプリカ農協・農家

主席研究員 藤野信之

昨年11月に、韓国 慶尚南道 陝川(ハプチョン)郡にあるパプリカ農協・農家を訪問する機会を得たので、その概要と動向について報告したい。

1 伽倻(カヤ)農協の概要

当農協の所在地は、韓国南部の慶尚南道 陝川郡 伽倻面内(首都ソウルの南南東約250km、釜山の北西110km)にある中山間地であり、人口5.5千人、韓牛6千頭が飼育されている。組合員は1,600人と少ない。

管内の農業は、パプリカ生産(温室栽培)、畜産(韓牛)等で、パプリカ輸出額1千万米ドル(約10億円)を目標としており、韓牛の売上高は400~500億ウォン(40~50億円)である。

夏用パプリカでは国内最大シェアを誇り、冬用と合わせても相当な地位にある。

2 パプリカ生産の経緯

従来は、当農協管内では日本向輸出用の花卉を生産していた。しかし、アジア通貨危機(97~98年)の際に農家の倒産が続出し、作目転換を図ることとなった。農協として適する作物を色々と探し、オランダが対日輸出で成功していたパプリカに着目し、それまで栽培されていなかった夏用パプリカについて、2001年に全国で初めて試験栽培を成功させ、生産をスタートすることとなった。

生産設備である園芸施設には政府支援があり、残りを農協が融資している。

3 パプリカ生産・販売の概要

農協管内に17戸のパプリカ生産農家があり、夏用生産に適するよう多くは標高800m以上に展開している(17戸以外は韓牛を生産)。園芸施設の平均規模は3千坪と広く、ビニールハウスが80%、ガラス温室が20%となっている。

販路は85~90%が日本向け輸出で、直接貿易で日本の輸入業者8社向けに輸出するとともに、間接貿易で農協中央会の子会社であるNH貿易に卸している。今回、テスト的に香港向け輸出を行った。なお、残りの10~15%は国内卸売市場向けに販売する。

農家の収支動向は、1千坪当たりで売上高2億ウォン(2千万円、14年<円安で減少>)、13年は2.7億ウォン、所得率は35~40%(所得は0.7~0.8億ウォン<7~8百万円>)となる。各農家の平均規模が3千坪なので、1戸当たりの平均売上高は6億ウォン(6千万円)となり、平均所得は2.1~2.4億ウォン(21~24百万円)という富農となる。最近では、08年の円安の時が一番苦しかった。

4 パプリカ生産農家の動向

農家の年齢は若く、平均的には夫婦に外国人労働者2名を加えた体制で生産している。外国人労働者は東南アジア(タイ、ベトナム、カンボジア)から雇っており、管内全体で50人いる。生産技術は農協も指導しているが、農家の方が優れている。

筆者は管内農家のうち、パプリカ自助会の

会長を務める篤農家であるY氏農場を訪ねた。当農場の所在地は中山間地で、標高470mの位置にある。

生産物はパプリカ(温室栽培)で、09～13年までビニールハウスで夏用を生産していたが、14年から冬用に転換し、その際にガラス温室を導入した。ガラス温室の規模は6千坪で、ビニールハウスからスタートし5年目となった。園芸設備は中央・地方政府が40%負担(13年から制度廃止)し、オランダ式だが国産のものである。ヤシ殻培土に養液を含ませる養液栽培で、栽培環境は全てコンピュータ管理している。コンピュータ管理システムはオランダ製で、温度、CO₂濃度等も自動制御している。

経営形態は家族農業で、夫婦とカンボジア、タイ等の外国人労働者10名を雇用している(最長5年契約のため、OJTで仕事の引継ぎをしている)。以前は株式会社だったが、この規模では相対的に小さいので家族経営に戻した。父君は農家で、Y氏は2代目経営者であり、子息は国の農業大学校に在学している。

パプリカの苗はオランダから購入(輸入)する。無農薬栽培で、天敵微生物の入った小袋を葉に装着して対応している。

生産技術は、オランダや他のコンサルから学ぶこともある。農協の援助も大きい。品質管理技術等は農家の方が勝っている。

もともとは夏用に準備した設備なので、標高は470mと冬用にはあまり適さず、暖房が必要である。これまで重油ボイラーで対応してきたが、原油価格の高騰で電気ボイラーに転換した結果、ランニングコストは60%低下した。ただし、初期投資には3億ウォン(3千万円)かかった。



Y氏のガラス温室全容

訪問時のハウス内の状況は、苗を植えてから4か月たったところであり、12月中旬から7月まで週1回のペースで出荷する。

パプリカは全量農協へ出荷しているが、価格がウォン高を中心に30%も下落して困っているとのことであった。

設備・運転資金とも自己資金が主だが、不足分は農協から借り入れている。給与、資材代金は農協からの借入で賄う。

5 注目される農協の地域農業振興

当農協は、アジア通貨危機後の管内農業再建に大きな役割を果たした。汎用野菜ではないパプリカへ着目するとともに、中山間地の高い標高を生かした夏用パプリカという差別化商品を編み出し、それまでの花卉で培った直接貿易の業務ノウハウを継いで対日貿易という輸出戦略を再開した。

農協による地域農業振興の好事例と考えられ、また、農協－農家間の取引関係、信頼関係も強いものがある。農協が地域農業に責任を持つ姿勢に感銘を受けた。

(ふじの のぶゆき)